

氏 名 にし むら けん じ
西 村 謙 司
学位(専攻分野) 博士 (人間・環境学)
学 位 記 番 号 人 博 第 139 号
学位授与の日付 平成 14 年 3 月 25 日
学位授与の要件 学 位 規 則 第 4 条 第 1 項 該 当
研究科・専攻 人 間 ・ 環 境 学 研 究 科 人 間 ・ 環 境 学 専 攻
学位論文題目 臨終の住まいの建築論的研究
——浄土教建築を通して——

(主 査)
論文調査委員 教授 伊 從 勉 教授 小 川 侃 助教授 西 垣 安 比 古
教授 田 中 淡(人文科学研究所)

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、浄土教建築において営まれた「臨終の住まい」のあり方を死すべき人間と場所との関わりの構造として解明するものである。浄土教の中でも、特に視覚表現を重視する『往生要集』を取りあげ、そこに登場する建築的事象における「建てること」と「住まうこと」に着目する。

第一章で、臨終の場所を「建てる」ことのあり方が、第二、三章で、臨終の「住まい」のあり方が解明され、全体を通して、死を自覚しつつ生きる人間にとっての建築のあり方が明らかにされている。建築物のみを対象として行われる傾向の強かった従来の建築学的研究とはちがい、人間と場所の関わり合いを全体として体系的に明らかにするとともに、その望ましい関わり方を人の死という究極の場所において原理的に究明することを試みた研究である。

第一章では、『栄花物語』に鍵語としてあらわれる「心たくみ」という言葉の建築的意味を明らかにすることを試みている。「心」は人間に内在するはたらきでありながら、同時に超越的な浄土が存在し得る場所であることが指摘され、その両義的あり方が解明されている。そして、そのような「心」を「身体」と一つにすることによって臨終の住まいが成立することを示している。「心たくみ」という建築的行為が、死すべきものとして生を全うし、この世において往生極楽の願いを実践するといった重層的な行為であることが明らかにされた。

第二章第一節では、『栄花物語』における「殿」(藤原道長)の「臨終の住まい」(阿弥陀堂)の場面描写を取りあげる。「仏」(母屋)、「殿」(廂)、「尼」(軒下簀子)の三者と場所の関係が、人間の死に向かうあり方の相違として語られていることを明らかにした。その上で、これら三つの場所は極楽往生を可能にする「阿弥陀堂」という一つの場所において統合され、重層的な人のあり方を建築が許容していることを指摘した。

第二章第二節では、「殿」(道長)の「臨終の住まい」の原型と見なされている『往生要集』に登場する「臨終の住まい」のあり方が解明される。全ての人間が受容しなければならない「死」を共通基盤として、「仏」と「病人」の間に「観る・観られる」関係が成立し、さらにその関係を「看病人」が看るという重層的関係が、「臨終の住まい」における臨終儀礼とともに成立することを明らかにした。

第三章では、『往生要集』に示された「臨終の住まい」のあり方を継承展開して営まれた「住まい」の諸事例を考察する。特に中将姫の臨終物語を背景とする当麻寺の練供養が取りあげられている。ここでは、練供養が行われることによって、極楽往生という超越的な宗教体験が成就し、当麻寺の境内に極楽堂—来迎橋—娑婆堂という三つの舞台を貫く超越的な向きをもった東西軸が現れることを確認する。そして、宗教儀礼が年々行われることによって、古代の伽藍軸とは異なった現在の伽藍配置の軸として東西軸が定着してきていることを明らかにしている。また、練供養において架けられる「来迎橋」が、日常世界の境界に秘められた世界の重層性を垣間見せ、我々の生活世界が、厚みをもち深まりゆく可能性をもっていることを直接知らせてくれる意義ある導きの「橋」であることが明らかにされている。

論文審査の結果の要旨

日本の建築が独自の姿を示すようになったのは平安時代であり、阿弥陀堂をはじめとする浄土教建築はこの時代を代表するものである。そして、その頂点をなすのは藤原道長、頼通父子の時代であった。それ故、この時期の建築については従来多くの研究が積み重ねられてきたが、その大部分は建築の物的構成に主眼をおいたものであった。建築を人間との関わりにおいて、人の生きる場所として解明しようとする研究は希薄であったと言わざるを得ない。本研究は「人間と場所の関わり合いのあり様を体系的に明らかにするとともに、住まいの成立基盤となっている場所の構造を究明する」ことをめざしており、新しい研究視点を提供する独創性をもった研究と言える。

本研究においては、まず『栄花物語』の「心たくみ」という言葉に着目し、その意味を詳細に分析している。従来の建築史学の研究ではこの言葉は施主と建築生産組織の関係を示すものとして解釈されてきたが、ここでは『栄花物語』の文脈に沿ってこの言葉を解釈することで建築に内在的な問題領域である「住まうこと」「建てること」の意味の解明を試みている。そして、当時の歌論との関わりを指摘し、建築制作論に新しい展望を示している。

上に解明された「心たくみ」という建築的行為は単なる「たくみ」ではありえず、そこに付加された「心」は人間に内在するはたらきでありながら、同時に超越的な浄土が存在し得る場所であることが指摘され、その両義的あり方が明らかにされている。このことをふまえて、この「心たくみ」という建築的行為によって成就されるべき「住まい」の場所が究明される。『栄花物語』の「殿」（藤原道長）の臨終場面の解釈によって、その場所が「母屋」（仏）、「廂」（殿）、「簀子」（尼）からなり、それらが「阿弥陀堂」という一つの場所に秩序化されていたことを示している。

さらに重要な成果は、『往生要集』に登場する「臨終の住まい」が「仏」「病人」「看病人」によって営まれることを指摘し、それが上に示された「阿弥陀堂」の諸場所の構造に類同することを見いだしていることである。そして、この三者の重層構造が、人間ののがれることのできない「死」を基盤として、「仏」と「病人」の間に観る・観られると言う関係が成立し、さらにその関係を「看病人」が看る、つまり、＜（観る・観られる）看る＞という関係と不可分に成立していることを明らかにした。

最後に当麻寺の練供養を取りあげ、そこに極楽堂—来迎橋—娑婆堂という三つの舞台を貫く超越的な向きをもった東西軸が現れることが確認される。この練供養においてかけられる「来迎橋」は阿弥陀堂における阿弥陀と死に行く病者をつなぐ五綵の幡が「橋」という建築的場所に転化したものであり、臨終の場（仏—幡—病人）の関係が（極楽堂—橋—娑婆堂）の関係へと大きく展開したものであることを明解に示した。

本論文は、この観点から、念仏の場であり来迎芸術でもある浄土教建築についての研究を、人の生きる場所の究明としてさらに発展させる新たな道筋を示した点で、高く評価できる。

また、本論文は、環境としての住まいの場所を人のあり方との関わりの中で原理的に究明しており、人間・環境学研究科の基礎理念および、自然・人間共生基礎論講座の研究方針にも合致している。

よって本論文は博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成14年1月15日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。